



An ounce of action is worth a ton of theory.
- F.エンゲルス

・共有資源管理

11月23日から12月10日（藤栄は11月30日～12月10日）の18日間、我々は雲南省昆明市および紅河州で農村共有資源（灌漑施設）の管理について現地調査を実施した。水利に関する現実、我々の想像を超えてはるかに難解かつ複雑であった。伊藤にとっては2回目の雲南調査であるが（第1回調査記録は本誌13号に掲載）、理解が深まった、というよりはむしろ昆明に来て混迷の度が高まった、という方が正しいように思われる。

調査の参加メンバーは伊藤・藤栄の他に、日本学術振興会特別研究員の高橋太郎氏、東京大学助教授の中嶋康博氏（後半3日間）である。周到な準備をして出かけたにもかかわらず、水利管理の形態や圃場の地理的条件について、地域間格差が大きく、プリテストのために用意した調査票は、ほとんど役に立たなかった。とはいえ、我々の an ounce of action が worthless であったというわけでは決してない。

中国農村の大きな特徴の一つは、農民の定住性が高く、土地なし層が存在しないことである。戸籍制度、農地請負制度の下、農民は都市への移住を制限され、農耕が半ば義務づけられている（この点については近年、制度が緩和されてきた。教育水準の問題により農外への移動が制限されている、と表現した方が適切かも知れない）。出稼ぎ労働者が半数に達するような村でも、共有資源管理に最低限必要な労働力（critical mass）を割り込んでいるような事態には至っていない。農村には若年労働者があふれており、担い手不足、集落

機能の喪失とは無縁の世界が広がっている。

かつて中国では人民公社が農村の経済活動のすべてを統括しており、農村の資源は集団的に維持・管理されていた。人民公社解体後に導入された戸別生産請負制により、農業の生産性は飛躍的に上昇したが、共有資源の管理が疎かにされた。それこそが「農業徘徊」の原因である、という我々の仮説は、インタビューの段階では、あっさりと棄却された。

灌漑施設の近代化 近代化といっても、小型ポンプの導入、水路のコンクリート化程度であるが、により、維持・管理労働が節約され、専門家がその任にあたっている。通説に従えば、施設の大型化・近代化により、上部機関が介入すると、既存の規範・ルールが破棄され、資源管理のパフォーマンスは低下する。しかし、当地の灌漑施設はきわめて規模が小さく、その管理も村民委員会、村民小組といった自治組織に委ねられている。また、水路については建設に携わった農民自身が、強い所有者意識を持っており、良好な状態が維持されている。村内の分水については相互監視とリーダーによる管理が徹底しており、「掟破り」は容易に発覚する。

共有資源の維持・管理に不可欠な集団行動は、非農業就業機会の増大によって崩壊する、といった仮説も、現段階では必ずしも支持されない。むしろ、所得・資産効果が働いており、農外収入が資源維持のために環流している。

さて、今回の出張を通じて、我々は中国の現地調査に関していくつかの教訓を得た。（1）中国人は例外なく饒舌、サービス精神旺盛であり、インタビューの質問とは関係ないことまでも延々と話したがる。非礼を承知で話に割り込まないと、誰のための調査か分からなくなる。（2）事前に基本的な概念を確認しておく必要がある。「分水の基準は効率性が公平性か」といった質問自体、容易には理解されない。（3）昼食で white wine と red wine の選択に迫られた場合、後者（葡萄酒）を選ぶのが無難である。前者は高アルコール濃度の白酒の場合があり、午後の調査に支障を来す。（4）女性のリーダーが少なくないから、中国語のほめ言葉くらいは覚えておいて損はない。

末筆ながら今回の調査では、雲南省社会科

学院の鄭先生，紅河州民族研究所の李先生，通訳の陳氏（雲南省社会科学院），範・劉両先生（雲南師範大学）には大変お世話になった。記して謝意を表したい。また，長時間にわたるインタビューに答えていただいた農村幹部，農家の方々にも厚く御礼申し上げたい。アフター5の中国流もてなしも，強く印象に残るものとなった。

（文責：伊藤）

・多面的機能

今回の調査を実施するにあたり，筆者は次のような仮説を念頭に置いたインタビューを実施できれば，と考えていた。それは，市場化の進展とともに，共有資源の管理水準が低下し，共有資源が発揮する多面的機能を維持できなくなる，というものであった。

筆者にとって，中国での調査はもとより，海外調査は初めての経験であった。農村と言えば，日本の農村風景が頭に浮かぶ筆者にとって，最も仰天させられたのは，人の多さである。どんなに標高が高かろうが，人が住めなさそうな地形であろうが，人間が生活している。多くの論者は中国の農村人口が過剰であることを指摘している。この点は日本の農村道を歩いていても人っ子一人出会わない，さもなければ，大半が高齢者との大きなコントラストである。

また，二つの印象的な場面に遭遇した。

一つめは，牛や豚の家畜を移動させている農民が携帯電話を手に通話をしながら家畜の世話を行っていた光景である。非連続的な技術導入と経路依存的な慣習農法の同居。これは中国農村の大きな特徴である。

二つめは，棚田の位置関係を把握するために高度3,000m級の奥地に行った時のことである。遠くから，子供達の歌声が聞こえてきた。我々はてっきりその地方の民謡を歌っているものと思っていたところ，通訳の方が笑いながら，それが今はやりの流行歌であることを教えてくれた。彼らはテレビなどを通じて，自分達の暮らしと都市の暮らしに大きな格差があることを知っている。地域間の甚大な経済格差と農工間労働移動を制限する戸籍制度。これもまた中国農村の大きな特徴である。

ところで，上記仮説を念頭に調査を重ねた

が，伊藤氏も記述しているように，調査村においては，市場化の進展による農外就業機会の拡大は共有資源管理，ひいては多面的機能維持を阻害する要因として作用していないとの印象を得た。資源管理，多面的機能の維持に必要とされる労働力のcritical massを割り込んでいないのである。

しかし，インタビューを通じて，どの村にも共通する点として，おおよそ次の点がわかってきた。一つめは，共有資源の管理に必要とされる労働力がどの程度であるのかは村民，少なくとも村のリーダーには認識されていることである。二つめは，共有資源の管理労働への出役は村民の義務であり，「当たり前」の仕事とみなされており，「仕事」というよりはむしろ同じ村に住む者同士で形成しあう共同体的な「秩序」として認識されている可能性がある。三つめは，こうした「秩序」に従いながら，村民は各自の農業生産に従事している，ということである。そして，おぼろげながら，村によってこうした「秩序」が少しずつ異なるのは，村と大きな市場との距離や自然条件等に対する対処の違いに由来するように思えた。

critical massの存在，一人あたり土地面積が狭小であることや村民による自治的な共有資源の管理が行われている点は，日本と共通しており，重要な分析視点である。これらの視点に着目することが多面的機能維持・発揮に資する政策的含意に結びつく研究成果を導出する何らかのヒントになるのではないかと考えている。

先輩研究者との共同調査は刺激的である。未知の事実直面した時の，思考や論理の展開の仕方を学ばせてもらえることが多い。また，良かれ悪しかれ，研究所内の通常業務の範囲内では知り得ない人柄にふれることができる。こうした点も今回の調査での収穫であった。

今回の調査では，多数の皆様にお世話になった。調査にあたって御協力，御助力いただいた全ての皆様にお礼申し上げる次第である。

（文責：藤栄）